

# 赤人の方法

——万葉集卷三雜歌六首の構成について——

奈 良 公 俊

## 一

万葉集卷三雜歌の部には、或本の歌一首を含めた計七首の短歌からなる山部赤人の作品が収められている。題詞には、「山部宿祢赤人の歌六首」としか記されていないが、作品内容から、旅に関わる諸相を詠んだ一群の歌と察せられる。全歌を、便宜上A～Fの記号を付して次に掲げてみる。<sup>(1)</sup>

### 山部宿祢赤人の歌六首

- A 繩の浦ゆそがひに見ゆる沖つ島漕ぎ廻る舟は釣しす  
らしも (3・三五七)
- B 武庫の浦を漕ぎ廻る小舟粟島をそがひに見つとも  
しき小舟 (3・三五八)
- C 阿倍の島鶺の住む磯に寄する波間なくこのころ大和
- D 潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が浜づと乞はば何を示  
さむ (3・三六〇)
- E 秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆるむ君に衣貸さまし  
を (3・三六一)
- F みさご居る磯回に生ふるなのりその名は告らしてよ  
親は知るとも (3・三六二)
- 或本の歌に曰く  
みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らせ  
親は知るとも (3・三六三)
- 旅を題材とし、単独の作者名の下、六首以上の短歌が詠  
み並べられている先行作品には、同じ巻三に収まる、  
○「柿本朝臣麻呂の羈旅の歌八首」(3・二四九～二  
五六)

○「高市連黒人の羈旅の歌八首」(3・二七〇)〜二七七)

の両歌群がある。上の赤人の歌群は、題詞に「羈旅」の二字がなく、また歌数も八首ではなく六首と二首少ないが、形式・質料ともに人麻呂、黒人の歌群に近似している点を取りあえず認めてよいとすれば、これをその系列下に属する歌群と位置づけることもできよう。そのような位置づけを試みたとき、人麻呂を始祖とする旅の歌の一個の系譜が出来し、赤人の歌群を先行作家のそれと引き合わせ、相対化する視座も生まれる。相対化して定位するに当たっては、一致点を見出し、普遍性を軸に読み解く方法も有用なら、相違点を見出し、特異性を軸に読み解く方法もまた有用と考える。

本稿では、赤人作品の中でもこれまであまり注目されることのなかった前掲A〜F六首の歌群を探り上げ、特に女の立場での作と目される群中Eの読解に重点を置きながら、さらにEを含む歌群が全体としていかなる組み立てを持つのか、歌群全体の構成の把握へと論を及ぼしてみたいと思う。

二

歌群第五首のE、「秋風の……」の歌には、歌中の

「君」が男の立場で男を指すか、女の立場で男を指すかの  
処決をめぐり、議論がある。

周知のように、万葉集における「君」の語は、男から女に對して用いられることは極めて稀であるが、女から男に對しても、また男から男に對しても用いられるので、四圍の作歌事情が詳らかでないときなど、いずれを是とするかの決定に困難が生じるケースがある。例えばEのケースがそれである。議論は必ずしも終結したわけではないが、こ最近女の立場で男を指すとする見方が強く支持されており、「衣」の貸与について歌った結句の「衣貸さましを」がその具体的な根拠として挙げられている(西宮『全注巻第三』など)。

「衣貸さましを」の結句表現に根拠を置き、Eの「君」が女の立場で男を指すとする見解は、以下の検証結果からいつて恐らく正解と思われる。

万葉集中、「衣(キヌ)ノコロモ」の貸借について歌い及んでいる例は、E以外に、沢瀉『注釈』なども引く、

イ 宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき妹もあらなくに(1・七五 長屋王)

ロ 我妹子に衣かすがの宜寸川よしもあらぬか妹が目を  
見む(12・三〇一一 作者未詳)

ハ 人妻とあぜかそを言はむ然らばか隣の衣を借りて着

なほも（14・三四七二 作者未詳）

がある。イは女が男に「衣」を「貸す」場合、「貸す」の同音から地名「かすが（春日）」を起こす口はその逆である（ただし、歌に詠まれた状況を見る限りでは、イ口ともに「衣」の貸与が実際に行われたとはいいがたく、Eが「衣貸さましを」と歌われている事実と併せると、むしろ貸与行為が実現せず、願意のまま中止することを歌うのがこの種の歌の本旨であるのかもしれない）。

男同士の間、

大納言大伴卿、新しき袍を摂津大夫高安王に贈る

歌一首

我が衣人<sup>コロモ</sup>にな着せそ網引する難波をとこの手には触るとも（4・五七七）

という贈与の例もあるにはあるが、少なくとも同性間において「衣」の貸与が歌われている確例はない。男から女へ「貸す」と歌う口の例もあるので、「衣を借す」といふ以上は必ず女の歌なりとは定め難（い）（山田『講義』）にしても、生活に根ざした、家単位での貸借と見られるハの東歌の例を別格とすれば、「衣」の貸与について歌うことは異性を対象にすると思見してよいと思われる。従って、「君」が万葉集の通則に照らしてほぼ間違いない男を指すとする、その「君」に「衣貸さましを」と歌っているE

の歌い手の立場は、必然的に女となる結論である。

もつとも、「キヌ／コロモ」は、その使い分けが上代においてどれほど厳密に行われていたかは不明ながら、

- ・ 上着／下着
- ・ 貴重な衣服／日常の衣服
- ・ 普段着／外出着
- ・ 着る物の総称／上半衣の称
- ・ 上半衣の称／着る物の総称

など、両者にそれなりの区別があったことを指摘する意見もいくつか提出されている。上掲イ口は、どちらも「コロモ」を「貸す」と歌う例であつて、「キヌ」を「貸す」と歌う例ではない。この点、「キヌ」を「貸さましを」と歌っているEの傍証として十全といえない瑕疵はある。

ともあれ、不安定な面も伴つてはいるが、「衣」の貸与について歌った他の用例から判ずるところ、Eの「君」は女の立場で男を指している公算が強いと見られる。すなわちEは、男の赤人が女の立場に立ち、女に成り代わつて詠んだ歌という訳合いである。「衣貸さましを」の句のほかにも、後述するように、山路を「越ゆるむ」と歌う発想と表現は旅する男の安危を気遣う女の歌に顕著なものであり、根柢の一斑となるであろう。前文に掲出したA〜F六首のうち、Eを除く五首はそのまま男の立場の作と解して

別段問題はない。Eが他のABCDFの場合と異なり、女の立場で詠まれた歌であること、以後の立論の要件としてまず確認しておきたい。

三

では女の立場での作と目されるEには、どのような作歌法や表現性の特徴が見られるか。これは着眼点によって種々析出できる可能性があるが、ここでは歌中の「越ゆるむ〔将超〕」の語に着目し、分析を試みることにしたい。

\* \* \*

動詞「越ゆる」に助動詞「らむ」が接続した形体の語は、私見によれば、Eの例を除き万葉集中に延べ一二首一例、正味一首一例を数える。左に掲げた前群が用例を含む例歌、後群がその作歌事情と作者である。

■例歌

- (1) 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆるらむ(1・四三)
- (2) 二人行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆるらむ(2・一〇六)
- (3) ……真土山 越ゆるらむ君は もみち葉の 散り飛ぶ見つつ……(4・五四三)

- (4) 朝霧に濡れにし衣干さずして一人か君が山路越ゆるむ(9・一六六)
- (5) あさもよし紀伊へ行く君が真土山越ゆるらむ今日そ雨な降りそね(9・一六八〇)
- (6) 後れ居て我が恋ひ居れば白雲のたなびく山を今日か越ゆるらむ(9・一六八一)
- (7) 山科の石田の小野のははそ原見つつか君が山路越ゆるらむ(9・一七三〇)
- (8) 草陰の荒蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆるらむ(12・三一九二)
- (9) 玉かつま島熊山の夕暮れに一人か君が山路越ゆるらむ(12・三一九三)
- (10) 息の緒に我が思ふ君は鶏が鳴く東の坂を今日か越ゆるらむ(12・三一九四)
- (11) 我がここだ偲はく知らにほととぎすいづへの山を鳴きか越ゆるらむ(19・四一九五)

注1 各傍線部の原文は、(1)〔越等六〕、(2)〔越武〕、

- (3)〔越良武〕、(4)〔将越〕、(5)〔越濫〕、(8)〔越良無〕、(10)〔越覧〕、(11)〔将超〕、である。(2)〔越武〕は、「コエケム」「コエナム」の古訓もあるが、現訓の「コユラム」に従う。

2 (1)の歌は他所に重出しているが(4・五一二)、

二首一例として扱う。

3 (8)は結句に「み坂越ゆらむ〔三坂越良牟〕」の異伝を持つが、二句一例として扱う。

4 (9)は「夕霧に長恋しつづ寝ねかてぬかも」の異伝を持つ。

### ■ 作歌事情と作者 ■

- (1)「伊勢国に幸す時」の歌……当麻真人麻呂の妻  
「大津皇子、竊かに伊勢の神宮に下りて上り来る時」の  
歌二首の中の一首……大伯皇女 (3)神亀元年(七二四)  
一〇月、紀伊国行幸時の「從駕の人に贈らむがために、  
娘子に詠へられて作る歌」……笠金村 (4)「岡本宮に天  
下治めたまふ天皇」の紀伊国行幸時の歌二首の中の一首  
……未詳 (5)(6)大宝元年(七〇一)一〇月、「太上天  
皇・大行天皇」の紀伊国行幸時の歌……「後れたる人」  
(未詳) (7)「宇合卿の歌三首」の中の一首……藤原宇  
合 (8)(9)(10)「悲別歌」……未詳 (11)「更に霍公鳥の啣く  
ことの晚きを恨むる歌三首」の中の一首……大伴家持  
右の例歌並びに作歌事情と作者から、「越ゆらむ」の語  
の運用における主たる傾向を摘出してみると、おおよそ次  
の四点になる。
- I 旅に関わる
- II 歌い手は女又は女の立場である

III 「越ゆ」の主語の呼称は「君」である

IV 「か」を受ける「越ゆらむ」(正確には「らむ」)は  
短歌中の結尾に位置する

まずI。これは当然といえれば当然かもしれないが、中  
も(1)が伊勢国への、また(3)(4)(5)(6)が紀伊国への行幸の旅で  
あり、天皇の行幸に関わるものが計五例と、全体の半数弱  
を占めている。

次にII。明らかに女の作であるのは(1)(2)の二例、女又は  
女の立場の作であるのは家持の(11)を除く(3)~(10)の八例であ  
る。(3)は金村の某「娘子」のための代作歌、(4)(5)(6)は女又  
は女の立場の作と見るのが有力な諸作、(7)の宇合の歌も同  
然であり、(8)(9)(10)の「悲別歌」は、おおむね女の作とされ  
ている。

またIIと表裏の関係にあるともいえるのがIIIである。一  
一例中、(6)だけが歌中に「越ゆ」の主語が現れていない  
が、残る一〇例は、(1)が「我が背子」、(2)(3)(4)(5)(7)(8)(9)(10)  
が「君」、(11)が「ほととぎす」である。

そしてIV。(1)(2)(4)(6)(7)(8)(9)(10)(11)の九例がこれに該当し、  
(5)が短歌としては唯一「か」との呼応関係を持たず、結尾  
ではなく第四句に「越ゆらむ」が位置している。なお、(3)  
は長歌の第一四句に位置する例である。

さて、諸家再々論及することく、ここに「越ゆらむ」と

歌う一類の型式を見ることのできるのではあるまいか。

「越ゆらむ」は、山路を旅行く男——その呼称は圧倒的に「君」である——の安危を気遣う女の歌に顕著な表現であり、旅に関わる〈女歌〉に独特の発想である、と。発想の基盤には、古代的狀況下における「旅人」と「家人」との呪術を背景とした共感關係があつたと見込まれるが、それは往古、女が男よりも靈的に優れ、宗教的權威として優位に立っていた事情と通じていると思われる。家持の(1)は、こうした〈女歌〉の型式を襲用しつつ、それを「ほととぎす」へ寄せる思いに転用した作といえよう。

Eもまたこのような類型の中にある。ただ、I II IIIに関しては他例との間に差異は認められないもの、IVに関しては、(5)同様他例との間に若干の差異が認められる。(5)もEも、「越ゆらむ」が「か」の結びとなつて歌中の結尾に位置せず、ともに第四句に位置しているからである。そこで、(5)とEの両例を比較してみると、(5)の場合、第四句に続く結句が、

——雨な降りそね

と、「君」が雨に降られないことを念ずる神頼みの懇願であるのに対し、Eの場合はそれが、

——衣貸さましを

と、寒風から「君」の身を守るために「衣」を「貸」して

あげたいと願う、自己の判断と行動に起因する非実現の所為として歌われているのがわかる。山越えの道々、雨に降られ、又は風にさらされて、「君」が辛苦を味わう責任の所在が、最終的に自己を超えた神にあるのが(5)であり、それが自分自身にあるのがEである。Eには、「衣」を「貸」さなかつた自分を責める気持ちや、それができなかったことを悔やむ心があり、(5)にはない自己観察と自己反省の姿勢が見て取れる(ただし、それは単純に両歌の優劣の差をいうものではない)。歌い手である女の自責の念や悔恨の情が、結句の「衣貸さましを」を通して、柔らかな嘆息混じりの呼吸とともに具体的に歌い添えられている点、Eは類型から一歩抜け出た優麗な感覚を有しているといえるのではあるまいか。

Eに流れる情調は、例えば大伴坂上郎女の、

大伴坂上郎女、姪家持の佐保より西の宅に還るに  
与ふる歌一首

我が背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至  
るまで(6・九七九)

の詠などに見られる、甥の家持を思う「暖かいさりげない叔母の心情表現」(吉井『全注巻第六』)に似ている。それは女が男を恋慕う性愛絡みの表意というよりも、どちらかといえば母が子を庇護し、いたわる、母性的な女性性の

表出に近い。小碓命が父帝景行の意を受けて熊曾建征伐に赴く折、叔母の倭比売命から「御衣御裳」を授かり、その呪能を借りて事を成し遂げた例（『古事記』中巻・景行天皇条）などを想起すると、かような濃やかな「心情」の深部には、女の「衣」が旅する「男を守る働きをした」<sup>(9)</sup>「靈妙な古代思想が伏流しているのかとも思える。坂上郎女の歌は、もとより右のようなものばかりでなく、さまざまであるが、坂上郎女の歌あたりに万葉集の〈女歌〉の新しい屈折点がある<sup>(10)</sup>とすれば、彼女とほぼ同時代に活躍した赤人の、女の立場での作と目されるEは、そうした坂上郎女を契機とする万葉集の〈女歌〉の新興に連動する一首と見ることもできよう。

\* \* \*

如上、旅に関わる〈女歌〉の発想によりながらも類型から一步抜け出た優麗な感覚を有し、母性的な女性性に近い温情が滲み出ているところにEの特徴が見られるのではないかと思う。しからば、女の立場の作としてかく特徴づけられるEは、A〜Fの歌群の中でいかなる意味を持ち、その役目を演じているのか。続いて歌群全体に目を向け、群中におけるEの布置について糺してみよう。

#### 四

A〜F六首の歌群を、新潮古典集成本は、これらが意味なく並べられた歌の集合ではなく、連続性を持つ意図的に配列された歌々であるという認識に立ち、次のように説く。すなわち、六首は帰京後にまとめて披露された宴歌であり、まず旅先の景を讃えた詠に始まる（A）。前歌と同趣の景物や用語を承けた望郷歌がそれに続き（B）、そこから望郷の焦点が絞られ（C）、さらに故郷「大和」を承けて「家の妹」に焦点を絞る（D）。「家の妹」を承け、今度は待つ妻の立場で作り（E）、前歌の妻と対比させる形で土地の女への求婚を詠んで結ぶ（F）。続く或本の歌は、一般性のある歌柄として広く流布して歌われたものであるという（以上、各歌頭注より摘記）。

歌群にれつきとした構成があることを看取し、六首間の有機的な関連性を鮮やかに説いた右の新潮古典集成本の説は、その明瞭さと精妙さにおいて、大方の支持を得るに足る優れた解析と思われる。本稿も、この新潮古典集成本の説を基本的に支持するものであるが、そこに解明又は克服すべき何らの問題点もないわけではない。

例えばAB二首の序次である。旅中の景観描出から始まり、次第に望郷の念をつのらせ、「家の妹」へと収斂され

ていくA→Dまでの展開は、なるほど構成意識の窺える漸進的な進行過程といえよう。しかしながら、行程に関わる地理を勘案した場合、この展開説明には少々無理があることがわかる。Aの初句に歌われている「繩の浦」と、Bのやはり初句に歌われている「武庫の浦」は、通常前者が兵庫県相生市那波の、後者が同県尼崎市から西宮市にかけての海岸一帯を指すとされており、起点と考えられる奈良から見ると、後者のほうが前者よりも手前に位置しているからである。つまり、実際の地理に従えば、AB二首の序次は、A→Bの順ではなく、B→Aの順でなければならぬ。些細な事柄かもしれないが、周密な構成分析を指向するのであれば、こうした細部への対処もゆるがせにはできないであろう（この疑問に対する私意は後に述べる）。

AB二首の序次への疑問もさることながら、それ以上に問題と思われるのは、男から女への歌い手の性の逆転とともに、海浜の景情から離れて陸路の岡越えの描写へと場面が切り替わるDからEへの展開である。というのも、かつて賀茂真淵『万葉考』が「別に端詞のあるべきを落しか」と訝り、別途記されるべき題詞の脱落を仮想して事態の合理化を図ろうと算段したように、また岸本由豆流『万葉集攷証』がE（並びにF）を旅の歌以外の歌と認知し、それゆえ題詞に「山部宿祢赤人の歌六首」とのみ記され、「山

部宿祢赤人の羈旅の歌六首」と記されていないと推断を下したように、A→DまでとEとの間には大幅な断層があり、歌群に意想外の飛躍が生じる体となっているからである。

新潮古典集成本によれば、Eは前歌Dの「家の妹」を承け、故郷で待つ妻の立場で詠まれた歌であるという（歌群構成を踏まえての注解ではないが、Eを故郷在住の妻の立場の歌と見るのは、真淵『万葉考』を始め、数書の注釈も夙に指摘する）。Eが故郷の妻の立場で詠まれた歌であるとする、DからEへの展開に伴い、歌い手の位置は旅先の異郷から故郷の「大和」にそっくり空間移動することになるが、これはEをそのまま旅先の異郷の女の作と見る本居宣長以来の考説と対立する。

宣長は、「此歌は、旅宿の遊女などのよみて、赤人に贈れるを、みつからの歌の中に、同じく書入おかれしなるへし、」（『万葉集玉の小琴』別巻・三之巻追考）とし、女を「旅宿の遊女」と、また歌をその「遊女」が赤人に「贈」ったものと推考した。その後、金子『評釈』、沢瀉『注釈』などが、宣長説とは一線を画しつつもEの原作者を「佐農の岡」（所在未詳。参照、注（4）論）近辺に住む女と考え、近時、伊藤博氏も、Eは旅先のある女から貰った「心根のやさしい歌として披露」されたものではないかと立言して



いる（伊藤角川文庫本、及び伊藤『釈注二』）。

故郷の妻、異郷の女、両々相応の脈絡はある。故郷の妻とする場合、前歌Dの「家の妹」を承けた、自然な（ある意味では意外な）展開と見ることができようし、また異郷の女とする場合、A、F六首の歌群を、あくまで異郷を舞台とする、一連の歌と捉えれば、考え得る一つの推論と見ることができからである。歌い手は当然異郷内の人間ということがある（ただし、Eの原作者が紛れもなく女であり、赤人がその女の作を実際に貰い受けたかどうかの事実関係は掌握しがたい）。

例えば、旅を機縁とする次のような男女の歌が万葉集にはある。

- (a) 妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる（3・二七六）
- (b) 一本に云はく「三河の二見の道ゆ別れかねば我が背も我もひとりかも行かむ」

これは、「高市連黒人の羈旅の歌八首」と題された歌群の第七首、及びその異伝歌である。作者は風景描出に関して赤人の先駆をなすといわれている黒人であり、本歌群の形式・資料は、赤人の歌群のそれに先立つと見なされる（前述）。(a)に歌われている「妹」は素性不詳。そもそもその存在自体を疑う向きもあり、実体は把握しがたいが、

「一本に云はく」として伝わる(b)が「妹」なる女を詠み手とし、(a)に唱和した歌であることは明らかであろう。(b)が黒人自身によって作られたものであるにしろ、ないにしろ、(a)(b)二首は異郷を舞台とする男女二人の掛け合いを表していると考えられる。

このような黒人の歌などを見ると、赤人のEも、旅先での《後朝の別れ》に似た別離の風情を女の側から詠んだ歌と考えられないこともない。異郷の女（宣長の言によれば「旅宿の遊女」）が行きずりの旅する男と結んだ「かりそめの関係」（窪田『評釈』）の余韻である。

しかしまた、旅を機縁とする次のような男女の歌も万葉集にはある。

- 岡本宮に天下治めたまふ天皇の紀伊国に幸しし時の歌二首
- (x) 妹がため我玉拾ふ沖辺なる玉寄せ持ち来沖つ白波（9・一六六五）
- (y) 朝霧に濡れにし衣干さずして一人か君が山路越ゆらむ（9・一六六六）

右の二首、作者未だ詳らかならず。

右の作者未詳の二首は、諸注一致して、(x)を旅行く夫の歌、(y)を家で待つ妻又は妻の立場の歌と解している。(y)は前記「越ゆらむ」の語の例歌中の(4)である。(x)の「妹」

は故郷に留まる妻ということになるが、一見して明らかないように、本二首は、赤人のAとFの歌群のDE二首に相似している。旅にある夫が家で待つ妻への海浜の土産を調べようと歌っているのが(x)であり、赤人のDである。土産とされるのは、(x)では「玉」、Dでは「玉藻」である。また転じて、山越えの陸路を行く夫の安危を気遣って詠んでいるのが(y)であり、赤人のEである。特に(y)とEとは、「朝」「衣」「君」「越ゆるらむ」など、語句・表現の上で共通する部分が際立つ。

(x)(y)の題詞に見える「岡本宮に天下治めたまふ天皇」とは齊明天皇を指し、『日本書紀』の記録によると、天皇の「紀伊国」への行幸は、齊明四年(六五八)一〇月一五日から翌五年(六五九)一月三日にかけて実施されている(窪田「評釈」など)。題詞の記載が誤りでないとすれば、(x)(y)は初期万葉時代の作ということになり、赤人のDEの成立年代よりも年代的に古い。(x)(y)が赤人の知見の範囲にあり、作歌の際に下敷きにされたか否かなど、(x)(y)からDEへの影響の有無については差し当たり不明であるが、各二首の類質性が濃いことは歴然としている。

(y)が(x)と「一对に伝誦」(中西講談社文庫本)された歌であり、家で待つ妻又はその立場の作であるとすると、かかる二首は、「海浜の抒情と山道の抒情」とを組み合わせ、

「旅に関する悲しみを万全の形で述べる一对の歌詠」として享受されていたとも考えられる。とすれば、DEは(x)(y)と同類の一对の組み合わせからなる二首と解することもでき、Eが故郷の妻の立場で詠まれたとする新潮古典集成本の説は、相似歌の存在という有力な証憑を得ることになる。

短絡に結び合わせ、性急に結論づけるのは慎まねばなるまいが、右の見分から推し量るところ、Eの歌い手は、異郷の女ではなく、故郷の妻である確度が高いと思われる。西宮「全注巻第三」は、やはりEの歌い手を故郷の妻と取り、「前歌(D)が旅の身そらで「家の妹」を思いやつているのに対応して、この歌(E)は妻の立場から旅ゆく夫を思いやつているという構成である。」(丸括弧引用者)と述べている。歌群の中に「対応」感覚や「構成」意識を読み取る態度は、新潮古典集成本の読解の仕方と同じく重視されてよい。なぜなら赤人は、長歌と反歌の均衡や、長歌中の対句表現の洗練<sup>14)</sup>、また一群の短歌における結構など、「対応」性や「構成」力の発達をもって知られる歌人だからである。歌の配列レベルの問題ではなく、表現レベルの問題であるが、例えばA並びBに見える「そがひに見(る・ゆ)」の句は、「構成的表現」として両歌の自然空間の描出に与るとされる<sup>15)</sup>。Eの歌い手を異郷の女と取る場

合、A〜Fの六首が異郷を舞台とする一連の歌であるという点で一貫した論理性を得られることにはなるが、DからE（さらにEからF）への続き具合に、歌い手を故郷の妻と取る場合のような展開性が得られなくなる点、首肯するに十分ではないと考える。

## 五

赤人は、故郷の妻の立場で詠んだEをDの直後に布置することによつて、

一、男から女への歌い手の性の逆転

一、異郷から故郷への歌い手の位置の移転

一、〈海〉から〈山〉への情景の変転

など、一見不合理と思えるような要素を抱えながらも大胆に場面の転換を図り、そこに奥行きと幅を具えた立体的な時空を生起させ、一連の歌が平面的な進行性や整合性の中で完結することを打ち破ろうとしたのであろう。打破はすなわち、歌群の中の各歌を同一の次元で歌い収める一元的な詠出方法からの脱却であり、歌群の中に他の歌とは次元を異にする歌を意識的に組み入れ、同時に並び立たせた、多元的な詠出方法の実践である。

この意味でEは、歌群の流れに起伏を与え、結果、それが作品全体を新たな創造世界へと押し進めていく動力とも

なった、赤人が仕掛けた一つの装置であつたといえよう。ここに、女に成り代わつて歌を詠み、巧みな効果を引き出すことに成功した、赤人の柔軟な発想と清新な方法とを見ることができると。

旅先の景を讃えたAに始まる旅行く男の歌は、BCDを経て、Eに至る。そしてEに至つて、それまで立ち現れなかつた側面が時空を超えて一挙に顕在化する。Eに至つて顕在化する側面とは、例えば時季・時刻の明確化（「秋風の寒き朝明」）であり、旅人の客体化（「君」）であり、「家の妹」の心情の具体化（「衣貸さましを」）である。Eを通じて、事実はともかくこれが秋の旅であつたことを、旅する男が朝寒の岡を越えて行つたことを、そしてその妻の心情がどのようなものであつたのかを、我々は理解する。

冒頭に述べたように、旅を題材とし、単独の作者名の下、六首以上の短歌が詠み並べられている先行作品には、人麻呂の「羈旅の歌八首」があり、黒人の「羈旅の歌八首」がある。

人麻呂の場合、その第三首に、

淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹き返す（3・

二五一）

とあり、故郷の妻と思われる「妹」が、紐結びの古代習俗とともに、呪術的共感的なつながりの喚起を基底としつつ

歌われているが、赤人の歌群のように当の「妹」が一連の歌の中に登場し、詠出を行うという場面はない。<sup>18)</sup>

また黒人の場合、故郷の妻への慕情は詠まれず、むしろ「妹」なる女との異郷における別離の風情が、唱和形式（黒人の独演ともいう）により、異伝歌の併置という体裁で一連の歌の中に組み込まれている（前述）。

赤人の場合はどうかといえ、Dに歌われている「家の妹」が、次のEで突如作品場面に登場し、夫の身を案じる趣深い詠出を行っている。これは多分に劇的である。

こうして、先行する人麻呂の歌群にも黒人の歌群にもない劇的な展開を設けながら、赤人の歌群は、「家の妹」すなわち故郷の妻と対比させる格好で、大尾のFに旅先の異郷の女への求婚を詠んだ歌を置き、全体を結ぶ。女への求婚は、異土に対する間接的な土地讃めを意味しており、Aが旅先の景の賞美から始まっていることと首尾照応する関係にある（伊藤『釈注二』）。首尾の照応を整えつつ、歌群は、異郷の女への求婚をもってめでたく、またうるわしく、その幕を閉じるといえようか。

以上、赤人のA〜F六首の歌群につき、特に女の立場での作と目される群中Eの読解に重点を置きながら、Eを含む歌群が全体としていかなる組み立てを持つのかを見てき

た。問題はなお多く存すると思われるが、最後に、次の点をいい添えてまじめに代えることにしたい。

群中Bの「粟島」の「アハ」に「逢ふ」の意が匂わせてある（新潮古典集成本）とすれば、同様の掛詞的な方法により、Aの「繩の浦」の「ナハ」には「名は」の意が匂わせてあると考えられないこともない。そしてこのAの「名は」は、Fの「名は告らしてよ」と首尾照応する関係にあるとも考えられる。実際の地理に従ったA B二首の序次は、B↓Aの順であるはずなのに、これがA↓Bの順になっているのは、あるいはAをFと首尾照応させるための、地理よりも作品構成を尊重し、優先させた、赤人の意図的な操作による結果だったのではなからうか。

また、「アハ」に「逢ふ」の意が、「ナハ」に「名は」の意が匂わせてあるとするなら、所在未詳といわれるEの「佐農の岡」の「サヌ」には、案外「さ寝」の意などが仄めかしてあるのかもしれない。

列挙されている地名の裏に、「名」「逢ふ」「寝」など恋歌にまつわる語々が巧妙に刷り込まれているとすれば、これも赤人が弄した仕掛けの一部として作品世界の形成に参じ、歌群に軽妙な味と色つやを加えていると思うのである。

注

- (1) 万葉歌の引用は、佐竹昭広・木下正俊・小島憲之三氏共著の『楠本万葉集』(塙書房 訳文篇 昭和四七年三月／本文篇 昭和三八年六月)による。以下同じ。
- (2) 参照、山口佳紀氏「古事記の表記と文体」(『古事記の表記と訓読』有精堂 平成七年九月。二二～七頁)
- (3) それ以外にも、例えば辰巳正明氏「秋風の歌——悲秋と閨情——」(『万葉集と中国文学 第二』(笠間書院 平成五年五月)が、比較文学的見地から初句の「秋風」の語を捉え、Eが中国六朝文学の情詩の世界の影響を受けた、男による女の立場の歌であることを説いている。
- (4) 詳しく立ち入る余裕はないが、荒木良雄氏「阿倍乃嶋と佐農能岡」(『万葉』第三十六号 昭和三五年七月)は、地名を根拠に、赤人の歌群を万葉集巻六記載の神亀三年(七二六)九月(『続日本紀』の記録では一〇月)の播磨国印南野行幸に従駕した際の作であろうと推定している。
- (5) 露木悟義氏「羈旅発思と悲別歌」(『万葉集を学ぶ 第六集』有斐閣 昭和五三年六月)
- (6) 特に「女歌」という名辞を用い、枠組みを与えてはいないが、「越ゆらむ」と歌うことに一類の型式を認めた注釈書や論考は多い。例えば例歌中の(2)、著名な大伯皇女の歌の類句・類歌として、山崎馨氏「大津皇子と大伯皇女」(『万葉歌人群像』和泉書院 昭和六一年一二月。初出昭和五二年一二月)が(1)(4)(6)(8)(9)(10)の六例を、稲岡

- 『全注 卷第二』が(1)(4)(6)(7)(8)(9)(10)及び(1)の重出歌(4・五一)の八例を、橋本達雄氏「二人行けど行きすぎ難き秋山——大伯皇女の歌一首の発想——」(『万葉集の作品と歌風』笠間書院 平成三年二月。初出平成元年二月)が(1)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)及び「便宜」として「あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし」(15・三七二三 狭野弟上娘子)の九例をそれぞれ挙げ、検討を行っている。またこうした型式を「留守の歌」として捕捉し、上野理氏「留京三首における人麻呂の方法——留守歌の系譜と流離の歌枕——」(『国文学研究』第七五集 昭和五六年一〇月)、高松寿夫氏「留守の歌」をめぐる考察——その発生・展開・消滅——」(『上代文学』第七二号 平成六年四月)などが独自に論を展開している(「留守」の用語は、早く佐佐木信綱編『分類万葉集』(岩波書店 昭和五年九月)に見えるものであるが、ここでは、先に掲げた「越ゆらむ」の例歌一例のうち、(1)(3)及び(1)の重出歌(4・五一)の三例が取り上げられている)。本稿における整理と分析も、これらを始めとする先学の積み上げた事績に負うところが大きい。
- (7) 神野志隆光氏「行路死人歌の周辺」(『柿本人麻呂研究——古代和歌文学の成立——』塙書房 平成四年四月。初出昭和四八年一二月)など。ただし、阿蘇瑞枝氏「万葉集羈旅歌の世界(一)——羈旅歌の誕生と巻七羈旅歌の世界——」(『万葉和歌史論考』笠間書院 平成四年三

月。初出昭和五二年一月)は、神野志論に疑念を差し込む。

(8) 藤井貞和氏「女性の霊的優位覚え書」(『物語の結婚』ちくま学芸文庫、平成七年一〇月。初出昭和五五年七月)

(9) 古橋信孝氏『和語の生活誌 雨夜の逢引』(大修館書店、平成八年一月)五三頁。

(10) 佐佐木幸綱氏「万葉集へ女歌」考」(『上代文学』第七六号、平成八年四月)

(11) (a)に見える「妹」の素性又はその存在自体の有無、並びに「妹」が詠み手となっている(b)の歌の制作事情や性格など、(a)(b)両歌の解釈をめぐる諸問題については、森朝男氏に詳しい論がある(尾崎暢殃・菊池威雄・升田淑子編『高市黒人——注釈と研究——』新典社、平成八年一月)。

(12) 伊藤博氏「紀伊行幸歌群の論」(『万葉集の歌群と配列』上、古代和歌史研究7)塙書房、平成二年九月。初出昭和六三年一月。四〇四頁)

(13) 有名な吉野讚歌(6・九二三—四、五)が代表的であろうか。参照、鈴木日出男氏「赤人の叙景の構図」(『古代和歌史論』東京大学出版会、平成二年一〇月。初出昭和五三年三月/昭和五五年三月)など。

(14) 参照、阿蘇瑞枝氏「後期万葉長歌における対句表現——赤人・金村を中心に——」(『国語と国文学』第六一卷、第四号、昭和五九年四月)、大畑幸恵氏「赤人の対句——

——行幸従駕の歌における表現方法——」(『稻岡耕二先生還暦記念 日本上代文学論集』塙書房、平成二年四月)など。

(15) 例えば、久米常民、清水克彦、坂本信幸、平館英子などの諸氏が、著名な春雑歌四首(8・一四二—四七)の結構について論じている(論文名は省略に従う)。

(16) 坂本信幸氏「時間・空間・山部赤人」(『国文学』と教材の研究』第二八巻七号、学燈社、昭和五八年五月)。他面、同句は、故郷に未練を残し、後ろ髪を引かれつつ旅する男の屈折した心象の描出にも与っているか。

(17) この点、本稿とは対象作品は異なるが、身崎寿氏「モノガタリにとってウタとはなんだったのか——記紀の『歌謡』について——」(『日本文学』第三四号、昭和六〇年二月)、同「歌中の叙述の主体という観点はどういう歌のよみかたをひらくか。——吉備津采女挽歌・令反或情歌など——」(『国文学』解釈と教材の研究』第四一卷六号、学燈社、平成八年五月)などに示されている論説と重なるところがある。

(18) 神野志隆光氏「注(7)論」。

(19) ただし、人麻呂には、別に「柿本朝臣人麻呂の歌四首」と題された、

男(4・四九六)  
男(4・四九七)  
女(4・四九八)

「女（4・四九九）」

のごとき、前二首が男の、後二首が女の立場の作で、しかも第一首と第四首、第二首と第三首とが対応関係にあると見られる四首構成の歌群がある。第二首で女は「妹」と、第四首で男は「君」と呼ばれている。短歌からなる一群の歌において男女が互いに詠出を行っている先例として、勘合すべき点を持つ。

〔付記〕

本稿は、第四回成蹊大学文学部日本文学科学研究集会（平成八年七月二七日 於成蹊大学）において口頭発表した内容を骨子とする。席上、遠藤宏、揖斐高、丸山俊の各氏より貴重な助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

また、本誌への掲載に当たっては、編集委員の各氏（特に神野志隆光氏）より適切な指導・助言をいただいた。同じく記して感謝申し上げます次第である。

「上代文学」投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内（注をも含む）とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰めに換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先（学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年）を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。